

第2回高知県社会教育委員会会議概要

日時：令和8年1月15日（木）13：00～15：00

場所：高知県西庁舎教育委員室、高知県西庁舎会議室

出席者：

（高知県社会教育委員会）社会教育委員長 齊藤雅洋、社会教育副委員長 久寿久美子、岩井拓史、
社会教育委員 徳増千里、眞鍋大輔、森岡千晴、吉田友一、佐竹真紀、
川上 確也

【1 意見交換会に向けた確認協議】（13：00～13：20）

事務局による説明のもと、意見交換会についての確認を実施。

【2 高知県教育委員会と高知県社会教育委員会との意見交換会】（13：30～14：00）

※（高知県教育委員会出席者）教育長 今城純子、教育委員 池康晴、小田通、森下安子、町田美紀、
弥勒美彦

1 高知県教育長挨拶

2 提言について

（委員長）

提言について説明する。説明に入る前に提言書の31、32ページを確認してほしい。社会教育委員は総勢11名いる。今日は9名の参加である。10回ほどの会をこれまでに開いたが、初回を除いて、これだけ対面での参加が多いのは、今回が初ではないかと思う。

これまで委員同士切磋琢磨し、協議、議論を重ねてきた。まず第1章では、高知県の若者の環境について、前提を確認する内容になっている。子どもたちの家庭や地域の状況、県内の大まかな状況がまとめられている。

第2章は提言書の肝としている部分である。冒頭にあるように「どのような若者に育てていくか」「若者にどのような環境（活躍の場・機会）があるとよいか」「地域・保護者の役割とは」の3つの問いを立てた。その問いに対して、9名の委員がそれぞれの立場で提言としてまとめた。今期の社会教育委員は、多彩なバックグラウンドを持っているので、それぞれの実践経験をもとに、3つの問いに対する意見をまとめたかたちになっている。

第3章1については、9名の委員の活動内容と若者に対する提言のエッセンスを抽出し凝縮した内容になっており、取組の方向性を示している。エッセンスを抽出する過程でもれている部分もあるかと思うが、それでも最も時間をかけて5つの方向性を出した。5つの方向性について補足する。

（1）「教育の場を地域全体で支える」について、「地域の大人がその背中を見せ」というフレーズがある。地域の大人が、子ども・若者たちに背中を見せるということが、大変重要であると認識している。第3章1で貫く全体の方向性は、大人の、子ども・若者への関わり方について述べているが、大事なことは、大人が背中を見せることで大人が教育の場を支えていくという、ある種の覚悟を表している。

（2）「本県ならではの教育環境を生かす」については、高知県が誰に対しても寛容で、他者を受

け入れる風土があるという、県の風土と共にコミュニティが小規模であるということ。小さなことはマイナスに捉えがちだが、それを逆手にとり、コミュニティが小規模であることを強みにしていこうということである。

(3)「多様な学びの機会と自発的な参加意識の醸成」、(4)「次世代へつなぐ資質の醸成」は共に、若者に様々な選択肢を用意する。その選択肢を用意した上で、選ぶのは子どもであり、若者であることを提案している。ただ、子どもは発展途上であるので、自ら選択肢を作ることは困難であることから、そこは大人の役目である。出された選択肢を選ぶのは子どもであるということ。

(5)「若者の活動を受け入れる人や地域との協働」は、子どもや若者のアクションを受け入れるという大人の姿勢が大事であることを示している。

次に、第3章1を受けて、2からは具体的な施策を8つ示している。これまでは、県教委生涯学習課の所管する施策や事業の重要性を再確認する内容が多かったが、今回の提言書は、それだけではなく県内の特色ある取組なども取り上げている。たとえば、(2)では津野町の道徳フォーラムを、(4)では室戸や土佐清水のジオパークのことを取り上げている。このような日本や世界的にみても、特色のある地域資源を活用するよう説いている。(5)は読書環境、(6)は海外を含めた地域外との交流の促進に触れている。ここでは、「トビタテ留学ジャパン」についての取組、また地域の留学生との交流などについて、(7)では子どもの居場所作りや子ども同士の交流の場の創出について触れている。

(8)は公民館や集落活動センターについて触れている。これからの社会教育活動を実施する上での拠点となる場所である。県内を見渡すと、集落活動センターのように公民館ではないが公民館的な役割や活動をしているところなどもある。そのようなところにも焦点をあてていく重要性について記している。

(委員)

社会教育委員として高知県をみたときに、少子高齢化、各種団体の規模縮小を実感する。しかし、地域の良さを残すことにより、子どもの学力の幅が広がり、将来の自分の生き方につながる。まさに何のために子どもを育てないといけないかというところに視点をおくことによって、社会教育と学校教育がタイアップすることで、地域で子どもを育てる土壌となる。

社会教育を発展させて、人間を育てる。高知県の子どもたちをどのように育てるのか。地域を担う子どもたちであるので、そのことで高知県の未来が決まってくる。そう考えると幼児教育の段階から、きちんと地域との関わりを深めさせていく。そのためには地域の良さをみる必要がある。具体的な手立てとしては、大学などである講座、歴史や文化、食など、総合的な学習の時間を組み合わせるなど、学校長も地域と共に学んでいくようなことが大事である。

また青年団の活動は、核家族化が進む中、地域で子どもたちを育てるという意識を持たせるように仕組んでいく必要がある。これらに関しては県や各市町村課とタイアップしていく必要がある。先日、当町でオリジナルキャラクターを作った。それは中学3年生が案を出し、町長・副町長を説得して完成した。近いうちに披露される。学校の中だけではなく、地域の中で取り組むことで、子どもたちも地域を愛することにつながると思っている。

(委員)

社会教育と学校教育を分けて考えがちだが、一体的に進めていく必要があるだろうと考える。子ど

もたちが世界に羽ばたいていく際に、ふるさとの歴史や文化を知って、土台を作っておく必要がある。そのためには社会教育が不可欠である。

公民館に携わっているので、学校からの要望には必ず応えるようにしている。連携や協働を超えて、学校教育と社会教育が一体となって取り組まなければならないと思っている。学校統合が進み、校区が広がっている。教員も子どもも自分たちの地元というよりは、中心市街地の学校に通うことになるため、地域を知る機会が少なくなっている。そうすると、地元に関する知識は固まらなくなる。そのこともあって、学校教育と社会教育の一体化の必要性を改めて感じる。

3 意見交換

(教育委員)

時間をかけて提言を作成してくれたことに感謝する。「子どもたちの志を育む」というのは、基本計画の中にも入れているが、「志」というのは単なる夢・希望ではなく、周囲の人を幸福にすることだとも思っている。それは学校教育だけでは限界がある。教員も負担感が増している状況の中で、「社会教育と一体化していく」という発言があったように、いろんな場面で、社会教育に助けってもらわなければならないと感じている。

私自身も学校教育に携わっていたことから、教員の負担感が多いことは知っている。授業だけでなく、いろんなことに携わらなければならない。教員の多くは地域の中に入って探究活動をさせたいと考えているが、そこまで手が回らないというのが事実である。学校としては、地域学校協働本部と学校運営協議会が両輪となって、社会教育と一緒にあって、探究活動などを行えるようになることが、一つの目標と思っている。

(教育委員)

提言書を読んで素晴らしいと思った。その理由として、高知県の課題をしっかりと捉えている点と方向性を定めている点。「大人が背中を見せる」や「地域の子どもを守る」など教育と社会教育の一本化を考えていく上で、重要な視点である。さらに良いと思ったのは、若い世代に焦点化している点である。特に若者は社会教育から離れがちではあるが、その若者を強引に引き寄せるのではなく、「若者の意欲や意思をサポートできるような大人の若者に対する向き合い方」にあるように、どうやって若者が社会教育に向き合う土壌を作っていくかということが提言書のコンセプトにあって、本当に学校教育と社会教育が一体化していかないとなし得ないものだと思う。

この提言書が、高知県の教育や高知県の課題を解決するための手立てとなるのではないかという期待感を持っている。特に「フック」という言葉が気に入った。青年団の活動や図書館のこともあったが、高知県にはたくさんのフックがあることを感じたし、それらをアピールしていけばいいなと思った。

またもう一つは「探究的な学び」の部分である。学校教育の中でも、「探究的な学び」は子どもたちに必要な力と位置づけられている。それが学校教育の中だけで終わってはいけない。そこを若者世代にどうつないでいくかということが大事だと思っている。学校教育の中に若者と入れるか、社会教育の中に若者と入れるか、そのような取組を行うことが大事であって、教育と若者を離さないきっかけになるのではないかと思う。

(教育委員)

現在、教育委員会では、次世代総合教育会議を開催している。高校生とこれからの教育について対

話をしているが、高校生から地域の課題を知りたい、地域と関わりをもちたいという声が出てくる。探究活動の学びを通して、中高生に地域との関わりが必要だと感じている。その声をさらに実現、発展させていくためには、教育と社会教育の一体化の必要性を改めて実感した。これからどう実践していくかを共に考えていけたらよいと思った。

(教育委員)

目次の「はじめに」から各章段へと視点がよく整理されていると思った。若者世代は、人生を左右する最も感受性豊かで多感な時期である。その時期をできる限りよい環境で過ごすことは、国全体で考えても、国の活力に直結する事柄である。

若者を取り巻く環境という意味で、若者の興味関心事の対象が拡大している。SNSやゲームなどとの時間の取り合いとなっている。そのため何のために勉強するのかを理解していないと安きに流れてしまう。動機付けができればと思う。大谷翔平のような有名人を呼んで話を聞かせることが手取り早いのだが、自分が人生で何をやりたいのかというような、ロールモデルを見せてくれるような、できるだけ近い世代の人から刺激を受けるとか動機付けが大事だと思う。

また提言の中にもあるように、子どもや若者が何かに取り組みたいと思ったときにその環境があるということは大事な要素だが、周囲の者がメンターになれるような、またそのような役割を果たせるような存在が大事なのではないかと思う。

(教育委員)

食農に携わる者として思うのは、本県は一次産業大国である。素晴らしい食農環境があるが、そのような人たちと接点を作っていかなければならない時代にある。昔のように、隣の畑で働いているような環境がなくなりつつある。特に市内などは、作っていかないと得られない人とのつながりが大事になってきている。社会教育の中に、そのような接点を作っていかなければならないことを認識した。種を蒔くという大人の力も必要、自分の世界に浸る時間が長くなって、引き出してあげないと、そのような世界に触れられなくなってきている。

すべての壁を突破できる訳ではないので、それを教育の力でサポートしたり、そのような社会教育の部分と教育の部分の包括的に見て、きっかけやチャンスの種を蒔いてあげることは大人であって、決めることは子どもである。子どもの声を大事にできる環境が大切だと思う。次世代教育会議でも、子どもの声を聞く場面は、昔より増えている。そのような声も共有して行けたらよいと思う。

(委員)

高知県では二極化や不登校の問題など、様々ある。願いは一刻も早く、この施策を実現させてもらいたい。具体化してもらい、一日も早く、高知のために、何らかのかたちで実現化してもらいたい。

(委員)

P. 26 (7) で取り上げてもらったが、学校教育と社会教育の一体化ということで、教員も若い世代の中で交流するというのが、テーマとなっている。私は土佐市出身だが、ナイターバレーに教員も参加し始めた。教員の話を知ると体験学習のコーディネーターをすることの大変さを聞いた。そこに青年団がサポートできれば、教員の負担軽減につながるのではないかと。若い教員が踏ん張っているところを、同じ地元の若い世代がサポートすることで、社会教育と学校教育の一体化が進んでいくのではないかと思う。また今城教育長から依頼をもらい、若い教員の入学式の際に、動画を寄せさせてもらった。そのような機会は非常にありがたい。

【3 意見交換会を踏まえた協議】（14：10～15：00）

（事務局）

意見交換会を踏まえ、提言完成に向けて、提言（案）にさらに修正希望がないか確認。修正希望がない場合は、提言冊子の作成を開始する。

（各委員）

修正希望なし。